●地域とともに●

明日にむかって

発行／社会福祉法人 陽光会　陽光保育園　編集／陽光保育園子どものしあわせを願う会
発行日／1995年４月20日　住所／東京都板橋区大谷口上町23-1 ☎(3956)1068

17号

阪神大地震（兵庫県南部地震）の犠牲者の方々に心からお悔やみ申し上げます。心身の疲労など重なるなか、避難生活を余儀なくされている被災者の皆さんに心からお見舞い申し上げます。あっという間に３カ月が過ぎてしまいましたが、これからが大変だと思います。
予知・予見を誇るのが人間の文化。先見の明を持った政治家が日本の近代にはいなかったのでしょうか。政治・政策のツケがこの災害で一気に噴き出してしまったようです。政治のツケはいつの時代でも、社会の弱者が被らなければならないのでしょうか。
「23区で防災がすすんでいるのは板橋区」と、新年の石塚区長の挨拶。栗原前区長最後の91年度の防災対策費は11億4,300万円。94年度は３億3,800万円に激減。これで「震災対策」はほんとうに大丈夫でしょうか。心配です。

保育制度改悪反対！

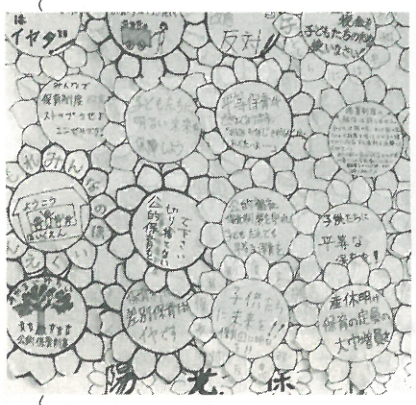
去る3月、陽光保育園では、国や都、区に対する要求や保育園に対する要求など、父母がいま子育てのなかで感じていることを、ひまわり型の布に書いてもらいました。
そのなかから一部を紹介します。

●安心して子どもを生み、暮らし、年を重ねるために、国はきちんと責任をとれ。

●子どもは親の宝、そして国の宝。税金をちゃんと使って、どの子も健やかに成長する権利を保障してください。

●保育園を企業の金儲けに利用しないで。子どもたちは商品じゃないんだぞー。

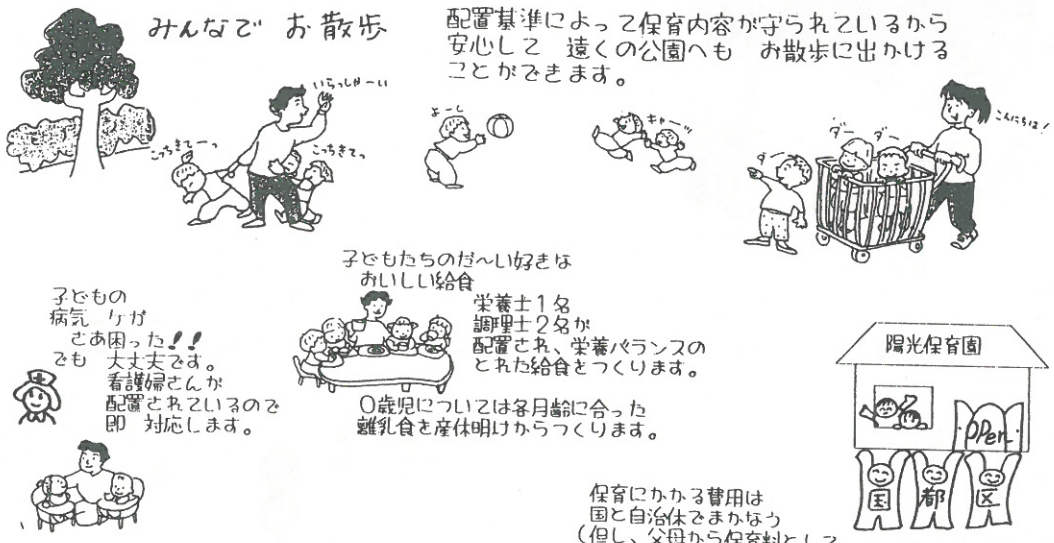
などなど、ひまわり型の布に父母たちの願いが託されていました。



陽光保育園について

保育園は地域の宝！守ろう！保育制度

PART3



配置基準によって保育内容が守られているから安心して 遠くの公園へも お散歩に出かけることができます。

保育にかかる費用は
国と自治体でまかなう
（但し、父母から保育料として
約50%徴収している。）

国	都	区
50/100	25/100	25/100

陽光保育園の職員配置と基準

	保母	子ども	
0歳児	1	3	1；3
1歳児	1	5	1；5
2歳児	1	6	1；6
3歳児	1	15	1；15
4歳児 5歳児	1	18	1；18

職員　常勤19名
（園長、保母、看護婦　栄養士、調理員）
パート職員9名
（障害児加算保母、特例加算保母、用務）

国は公的制度を見直す
といって
→ エンゼルプランを発表
（財源は消費税アップで）

- ★利用者のニーズに応える保育所に（？）
- ★かかる費用は利用者負担
- ★措置費でなく補助金で→経営不安定になり保育園どうしの競争になる（子ども集め）
- ★コスト主義→安上がりにするため職員は正規を減らしパート化へ
- ★保育の内容はお金で買う→子どもが差別される

陽光新春落語会、盛況でした

柳家一九さんと、春風亭あさりさんをおよびして、1月21日、陽光新春落語会を開きました。在園、卒園の父母のほか、近所の方もたくさん来てくださり、新春の一夜、華やいだ時間をもちました。（主催：陽光保育園後援会）

24年間ご苦労さまでした

この3月末、内田真代先生が定年（55歳）退職されました。長い間、ご苦労さまでした。4月8日、第38回卒園有志の皆さんの呼びかけによる「大城松健　ギターコンサートのプレゼント」の催しがありました。写真は、卒園児（中3）より花束を贈られた内田先生。

第46回卒園式が行われました

3月、春分の日、第46回卒園式が行われ、17名の子どもたちが巣立っていきました。お父さん、お母さん、これからが子育て本番です。

★ひまわり募金ありがとうございます。
（94年10月20日～95年3月31日　敬称略・順不同）

●**個　人**　神林サト・田中良雄・田島礼子・石巻志保子・清水章子・島扇静雄・北原寛子・松崎君子・山本留美子・伊東靖子・内田真代

●**団　体**　リズムの会

●**募金箱**　バザー（12月4日）・新春落語会（1月21日）

★ひまわり募金は、左記の口座で随時、寄付金として受け付けています。

●郵便振替口座番号
00140―5―25167

●加入者名
社会福祉法人陽光会　陽光保育園

★ひまわりテレフォンカードもご利用ください。保育園事務所にあります。

パート保母急募
午後3時～5時半
＊お問合せは3956―1068

■陽光保育園後援会　総会
〔日時〕5月13日(土)　pm6時30分～
〔会場〕陽光保育園ホール
・第一部　朝鮮の民族舞踊
・中休み　ティータイム
・第二部　議事
陽光保育園後援会は、今年もバザー、学習会、春・夏・秋の交流会など、いろいろ企画しています。

■陽光保育園父母の会――今年もやっています
●廃品回収……毎月第4土曜日
●ベルマーク……常時。保育園南出入口の横の黄色の箱で回収しています。

親子でいっしょにあそびましょう

☆リズム、うた、散歩、砂あそびなど☆

陽光保育園では、地域の乳幼児、お母さんを対象に、月1回、「親子でいっしょにあそびましょう」のもよおしを行っています。気軽にご参加ください。無料です。

〔場所〕　陽光保育園
〔時間〕　午前9時～11時
〔対象〕　0歳児～5歳児
〔今後の日程〕

5月16日(火)	☆12月21日(木)
6月8日(木)	…冬のつどい
7月13日(木)	1月9日(火)
8月2日(水)	…新年のつどい
★9月7日(木)…園外保育	（もちつき）
10月17日(火)	2月8日(木)
11月9日(火)	3月5日(火)

★印…1歳児以上は弁当を持参してください。
☆印…豚汁を作ります。おにぎりのみ持参してください。
◎動きやすい服装でおいでください。
◎参加ご希望の方は事前にご連絡ください。

TEL 3956―1068

特集◆子どもの発達を考える―⑩

子どもたちでつくる――冬のつどい

陽光保育園の子ども達がとても楽しみにしている行事の一つに〝冬のつどい〟があります。毎年十二月下旬、園をあげて三日間連続で行われる行事です。

この企画は、子ども達が冬の寒さに負けず元気に過ごせるように、子ども達の手作りの遊びを通して、大きい子の自覚を高め、仲間関係を豊かに広げ、また、室内遊びの充実を目的にしています。

第一日目は「お店屋さんごっこ」です。二日目は「茂呂山公園での豚汁大会」。そして、最後の日は「保育園ホールでのつどい」です。

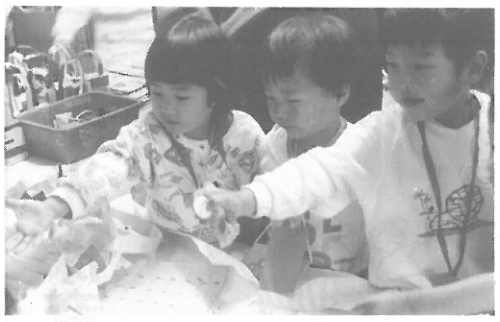
みんなで考えよう、お店屋さんごっこ

十一月半ば、四、五歳児が集まって「お店屋さんごっこ」の話し合いが始まりました。さて何屋さんを作るのかをまず決めなくてはなりません。子ども達は昨年のことを思い出しながら、どんどん意見をだし合います。お母さんが保母さんのKちゃんは「本当のダイヤモンド屋さんがいいなー」と発言。「エーッ、本物のダイヤモンド？」「折り紙で作ったら」「Kちゃんの家ダイヤモンドあるの？」「あるかもしんないよ。保母さんってお金あるんだって、お母さん言ってたもん」とK太君。

「お化け屋敷がいい！　ちょうちんお化けとかビックリ箱とかあってサァー」とO君。「Mはね、劇場になって〝七人の小人と白雪姫〟やりたいんだ」と話し合いはますます賑やかになります。その結果、やっと「お化け屋敷」「劇場」「風船屋さん」「レストラン」「おもちゃ屋さん」「お菓子屋さん」「銀行」に皆の意見はまとまりました。

次はレストランのメニューを決めます。真っ先にDくんが手をあげます。「卵ごはん最高だよ」「納豆ごはんもいいよ」「ぎょうざ」「焼きそば」と好きなメニューがどんどん飛び出します。中でも〝きびなごサラダがいい〟と言うK君とY君は、すごい勢いで主張。「オレ達ね、レストランで食べたんだ。すごいうまかったよな」「うん本当」「じゃこれにしよう」と。決定したメニューは、『カレーライス』に『きびなごサラダ』です。

このような話し合いが三回おこなわれ、各お店の担当が決まりました。そしておもちゃ作りが始まります。



上▶お店屋さんごっこで一番の人気は、なんといってもおもちゃ屋さん。あれもこれも、みんなほしい～！
下▶牛乳ビンのキャップがお金。紙で作ったお財布からそのお金を取り出し、買い物する目つきは真剣

今年は、フェルトで作った腕時計、わりばし鉄砲、牛乳パックで作ったブーメランや箱、トイレットペーパーの芯で作った双眼鏡、パッチンガエル、折り紙の手裏剣や新聞広告の剣や冠等々、十七種類もの手作りおもちゃが所狭しと並びます。

さて、子ども達の気持ちも大きくふくらんで、準備万端ととのったところで、〝冬のつどい〟を迎えます。

子どもたちの劇場では、ペープサートの出し物のまっさいちゅう。見るほうも、するほうも一生懸命

売り手も買い手も、目がランラン！

一日目はお店屋さんごっこです。小さいクラスの部屋もすべてお店に変身します。みんな、買い物袋を持って集まります。まず一番に集中するお店はおもちゃ屋さん。三歳児が作ってくれた広告紙を丸めただけの剣もよく売れました。銀行も大忙しです。ダンボール製の自動送金機が配置されていて、この中にK君とAちゃんが入って、カードを穴に入れた子へお金が渡される仕組みです。ところがこの送金機、なかなかお金（牛乳ビンの丸いフタで作ったもの）が出てきません。あとで二人に聞いてみると、この箱の中は暗く、お金がよく見えないし、とっても暑かったのだと、目を輝かせて話してくれました。

二階の子ども劇場では、『三匹のこぶた』が上演されています。声色を使ったD君のオオカミ、4歳のYちゃんも自信をもってやっています。拍手喝采、お客が絶えません。

豚汁、おいしいね　ぼくたちで切ったんだよ

二日目は、〝茂呂山公園のつどい〟。先発は年中のうさぎ組。リヤカーにブロック、薪、鍋を積んで運びます。汁の具は年長のかもしか組さんが保育園で切って、ビニール袋に入れて、あとから追いかけます。公園に着いた頃にはほどよくお鍋の湯が沸いているという段取り。寒さの中で食べる豚汁とおにぎりは格別です。三杯もおかわりした子が何人もいました。そして、残りの置き火で焼く焼き芋は最高です。

最後の日は、保育園ホールでのつどいです。各クラスの子ども達が出し物を披露します。いつも遊んでいる手遊びや歌がとび出します。そして、職員の出し物もあります。今年は『かさじぞう』の紙芝居を基にしてスライドを作り、上映しました。

〝つどい〟を締めくくる最後は子ども達へのプレゼントです。年長さんには素敵な民芸コマが手渡されます。陽光保育園では、この自分のコマが回せるようになって卒園していきます。こんな取組の中で子ども達一人一人が生き生きと自分を出し切って、大きな自信と粘り強さ、仲間への思いやりなど獲得して、春を待ちます。

（元4歳児クラス担任・徳留　人美）

子育て1分メモ

魚離れから子どもをとりもどす

日本は世界一の魚の消費国です。漁獲量も世界全体の約七分の一、肉の消費は増えましたが、水産物のウエイトもまだまだ多いのです。漁業の技術水準も世界のトップレベルです。

日本の文化も魚と密接な関係にあります。例えば、節分の時、イワシの頭を飾って魔除けにする風習が見られるなど、数限りなくあります。魚の登場する昔ばなしも各地にたくさん残っています。

日本人の魚の食べ方は、魚の種類が多いので、刺身のように魚そのものの持ち味を活かす食べ方に特徴があります。西洋の肉料理は、味付けやソースの味を工夫しないかぎり、味は同じようになってしまいます。

このように、日本人の食生活と魚は密接な関係にあるのに、どうして最近、魚離れの傾向が出てきたのでしょうか。まず、子どもの魚離れというよりも、親が魚離れになっています。おいしい魚が手に入りにくい、魚の値段が高い、料理法も手軽ではない、こんな理由で魚が食卓にのぼらなくなり、子どもの目に触れず、口に入らなくなったのです。

料理法も変わってきました。今は肉料理と同じようにフライにして、ソースの味で楽しむ食べ方が増えてきましたし、加工食品を利用した料理も多いです。肉と魚の区別がつかなくなっています。つまり、肉もそうですが、原形が分からなくなっています。昔は、尾頭付きはご馳走でした。昔からご馳走というのは原形のまま料理したものを意味していたようです。

また、生活様式の変化から、魚を焼いて煙をモクモク出すなど考えられなくなってきました。都会では特にそうです。

しかし、前述したように、魚文化は日本人には欠かせない文化ですし、魚の栄養も見逃せません。そこで、魚を素材と考えて、ほぐしたり、つぶしたりしてもかまいませんから魚料理をたくさん食卓に出すことです。まず、味に慣れろです。その時に、実はこの魚はこういうものなのだという原形を知らせるのです。食べた魚料理が美味しかったら、絶対に気持ち悪いとは言わないはずです。魚を身近に感じさせることが魚料理を好きにさせるコツです。

（沢野勉著『食べる育つ生きる』芽ばえ社刊を参考にしました）

お父さんの出番です！

我が家では、トイレとお風呂が〝お父さんの出番〟？

私の家族は、二歳の麻耶と妻、それに昨年の六月に家族に仲間入りした麻依の四人家族である。麻耶は0歳で陽光保育園に入園し、今は二歳児クラスのあひる組になったところである。

〝這えば立て、立てば歩めの親心〟とはよくいったもので、私もまさにそのとおりだったのだが、早いもので、朝バギーに乗せて登園し、検温とオムツの交換をしてから預けていたのが、今では一人でズボンやクツもはくようになり、自転車で送り迎えできるようになったので、朝がいくらか楽になった。

起床はいつも七時。朝食がすんで一刻が過ぎると、マヤの仁王（臭う？）立ちのウンコタイム。トイレでのモウモウさんスタイルでの後始末は私の仕事である。最近では、出かける一〇分くらい前にはトイレに行かせるようにしているのだが、機嫌がよいときは素直にするものの、そうでないときは大変である。

バタバタと家を出て、自転車で約一〇分、園に到着する。園にマヤを預けると、暗くなるまでのお別れであるが、ついこのあいだまでは泣きじゃくっていたのが嘘のように、最近では遊びながら、横を向いてのバイバイである。

午後五時、〝もう帰るの？〟と目が言っている同僚をあとにそそくさと退社し、園にマヤを迎えにいく。雨の日、風の日、寒さの日……どんな日にもこれは変わりない。家に着くと夕食までの時間、マヤの遊び相手をしながら、パパはお酒をチン！　ひと息いれる。

私の日常はおおよそこのようなものだが、父親が子どもと触れあうことの大切さを痛感したのは昨夏のことである。二番目の子どもの出産のために妻が郷里に帰ったときのことだ。私はしばし独身生活を楽しんだ（？）後、会社の夏休みを利用して家族を迎えにいった。「麻依ちゃーん、麻耶ー、お父さんですよー」と口の中で何度か練習したりして訊ねたというのに、娘は「あの人だあれ、知らないオジサンが来た」とばかりに逃げまどい、あげくに物陰に隠れてしまったのである。

三か月ばかりのことで、かくのごとき現象がおきるとは予想だにしなかったが、それから数か月、今では何事もなかったような毎日だ。夕食後、マヤとお風呂で遊んでいると、「お父さん、そろそろ出番ですよ！」と妻の声が聞こえる。（0歳児クラス・麻依、2歳児クラス・麻耶の父　嶋村政男）